

## リグヴェーダにおける表現「心臓において (L.) 貫く (√vyadh)」とその意味的展開

竹崎 隆太郎

### 0 序論

リグヴェーダ (RV) における「心臓」全 106 例の用法は、文脈に応じておよそ以下の 6 つに分類できる。(1) 定型句 *hṛdā vīaks* 「心臓によって (讃歌を) 形作る」において、詩作過程が心臓を用いた大工仕事に喩えられる<sup>1</sup>。(2) 同じく詩作過程が心臓を用いたソーマの精製に喩えられる。(3) その中に光 (*jyōtis-*, *praketa-*, *keti-*), 意図 (*ākūti-*), 意志 (*krātu-*), 望み (*kēta-*), 思考器官 (*mānas-*) があり、詩人がその中に真の實在ともいふべきものを見 (*√paś*) たり、求め (*prāti vīś*) たり追っ (*√ven*) たりする。(4) そこに恐れ (*bhī-*) 慾望 (*kāma-*) が来ると言われる。(5) それは敵や病気によって破壊されうる。(6) インド・イラン祖語に遡る表現 *\*hṛdā mānasā* > Skt. *hṛdā mānasā* 「心臓によってもマナスによっても」とその変形中に現れる。

本稿では RV における上記用法 (5) のうち、「心臓において (L.) 貫く (√vyadh)」という観念を中心に考察する。

### 1 心臓と言葉の矢

RV における 106 例の「心臓」の用例のうち 3 例においては、敵の心臓を攻撃対象として、祭官が放つ呪いが矢に喩えられる。これは敵の急所たる心臓を貫くという RV より記録される実際の戦法と、戦場における祭官の魔術的役割に由来するものと思われる。「祭官の口から放たれた祈禱の矢が敵の心臓を貫く」というこのモチーフは呪法讃歌によく見られる。

<sup>1</sup> Cf. Takezaki in press.

<sup>2</sup> 「祭官の口から放たれた祈禱の矢が敵の心臓を貫く」という観念を作り出した要因の一つとして、戦争の際に祭官が武器に勝利の呪いを掛けるという習慣が挙げられるだろう。RV 6.75 はそのような目的の呪法讃歌であり様々な武器に対して呪わないの言葉があるが、特に以下の詩節は矢に対するものである。

RV 6.75.16

*āvasṛṣṭā pārā pata śaravye brāhmasaṁśite*  
*gācchāmītrān prā padyasva māmīśām kām canōc chiśah*

放たれて向うへ飛べ、言葉の力 (ブラフマン) によって研ぎ澄まされた矢よ！

同盟関係を持たぬ者どもへ行け！前へ踏み込め！あの者どもの誰をも余すことなかれ。

AVŚ 3.19.1 ≈ AVP 3.19.1 (敵軍を打ち負かす呪わないの冒頭)

*sāṁśītaṁ ma idām brāhma sāṁśītaṁ vīryam bālam*  
*sāṁśītaṁ kṣatrām ajāram astu jīṣnūr yēśām asmi purōhitah*

ここなる私の言葉は完全に尖らせられて、勲は、力は完全に尖らせられて、

王権は完全に尖らせられて、不朽であれ、私がそれらの勝利するブローヒタたる所の、

## 2.1 言葉が矢として心臓を貫く

RV 中で「心臓の破壊」の文脈で、「*vyadh* 貫く」という動詞が用いられる例が存在する。この場合、言葉の矢は神格ではなく敵に射られる。

次の讃歌は *agnī- rakṣohān-* に捧げられた、アタルヴァ的呪法讃歌である (12c *atharvavāt* 「アタルヴァンの如く」参照)。祭官たちの敵たる呪術師どもを殲滅し、敵意ある諸力から祭官たちを保護するよう、激しい口調と内容でアグニに求める讃歌であり、そこでは言葉が毒矢となって敵の心臓を貫くと表現される。

RV 10.87.4, 13 = AVŚ 8.3.6, 12 = 10.5.48 = AVP 16.6.5, 7.2 ラクシャスを打ち殺すアグニ讃歌

*yajñāir īśūh saṃnāmamāno<sup>3</sup> agne / vācā śalyāṃ aśānibhir dīhānāh*  
*tābhir vidhya hṛdaye yātudhānān / prāṭico bāhūn prāti bhandhi\_ eṣām* |4|

祭式たちによって、矢たちを然るべき形に曲げつつ、アグニよ、  
言葉によって、鏃たちを鏃の先 (?) たちともども、(毒で) 塗りつつ、  
それら (矢) によって、呪術なすものどもの心臓を貫け!<sup>4</sup>  
そいつらの刃向う腕たちをお返しにへし折ってやれ!

*yād agne adyā mithunā śapāto / yād vācās trṣṭām<sup>5</sup> janāyanta rebhāh*  
*manyór mānasah śaravyā jāyate yā<sup>6</sup> / tāyā vidhya hṛdaye yātudhānān* |13|

アグニよ、今日二人が呪いを掛けんとする時、  
言葉から荒々しい [呪い *śapātha-*] を声を上げる者 (詩人) たちが生む時、  
激情から、マナスから生まれた矢  
によって、呪術なす者どもの心臓を貫け!

敵目がけて口から射られる破壊的祈禱の矢という観念は、以下のアタルヴァヴェーダの詩節においてより明瞭にみられる。バラモンは不可侵なので、その牛を王族が食べぬようにと主張する所である:

AVŚ 5.18.8-9, 15 ≈ AVP 9.18.3, 2, 1 バラモンの牛を王族が食べぬようにという讃歌

*jihvā jyā bhāvati kūlmalam vān / nāḍikā dāntās tāpasābhīdigdhāh*  
*tēbhir brahmā vidhyati devapīyūn / hṛdbalair dhānurbhir devājūtaiḥ* |8|

舌は弓弦となる、言葉は軸と、  
歯たちは熱力によって (毒として) 塗られた鏃となる。  
それら心臓の諸力という、神々に急かされた弓でもって、  
祭官は神々を誘る者どもを貫く。

<sup>3</sup> 意味についての議論は Geldner 註, Gotō *I.Präsensklasse* (1987: 194) を見よ。またそれによれば, *ākūti-*, *mānāṃsi* をも目的語に取る (e.g. AVŚ 3.8.5).

<sup>4</sup> ここでの構文は英語などと同じく, 「人 (A.) を心臓 (L.) に於いて損なう = 人の心臓を損なう」であることに注意。

<sup>5</sup> 意味についての議論は EWA 参照。Cf. RV 10.87.15b, 10.85.34.

<sup>6</sup> 12 音節。

リグヴェーダにおける表現「心臓において (L.) 貫く (√vyadh)」とその意味的展開

*tīkṣṇéśavo brāhmaṇā hetimānto<sup>1</sup> yām āsyanti śaravvyām ná sá mīśā  
anuhāya tāpasā manyūnā ca<sup>1</sup> utā durād āva bhindanti\_enam* [9/

鋭い矢を持ち、投げる武器を持った祭官たちが  
射る矢は無駄にはならぬ（逸れることはない）、  
熱力と激情によって追いかけて、  
そしてその者を遠くから割り倒す。

*īsur iva digdhā nṛpate<sup>1</sup> prdākūr iva gopate  
sā brāhmaṇāsyēsur ghorā<sup>1</sup> tāyā vidhyati pīyataḥ* [15#]

（毒で）塗られた矢のようだ、男たちの主よ！毒蛇のようだ、牛たちの主よ！  
祭官の恐るべき矢はそのようだ、それによって彼は誇る者どもを貫く。

本節で挙げた諸詩節では、矢を整える、鏃に毒を塗って敵の心臓を狙って発射して殺すという戦い方<sup>7</sup>に、必ず実現するとされるバラモンの言葉によって、敵を皆殺しにする戦いが重ね合わせられている。祈禱者の言葉は空間的制約なしに敵をどこまでも追いかけることが出来るので、実際の矢以上に致死性的となる。

## 2.2 心臓に矢を射る

本節では、*hṛtṣv-ās-*「心臓たちの中に投げる、(矢を) 射る」を扱う。これは直前の *āsānn-iṣu-*「口の中に矢を持つ」同様、RV で以下に掲げる詩節にただ一度出て来る複合語である。「√vyadh 貫く」という動詞こそ用いられていないものの、祈禱が矢の形を取って口の中から発射され、そして敵の心臓を貫くという同様のモチーフを表現している。

RV 1.84.16 (インドラ讃歌)

*kó adyā yuñkte dhurī gā ṛtāsyā<sup>1</sup> śimīvato bhāmīno durhṛṇāyūn  
āsānniṣūn hṛtsu\_āso mayobhūn<sup>1</sup> yā eṣām bhṛtyām ṛnādhat sá jīvāt*

誰が今日天則の牛たちを軛に繋ぐのか、  
活動的な、輝く／怒った<sup>8</sup>、ひどく怒った、  
口の中に矢を持ち、心臓たちへと射る、元気づけとなる [牛たち] を。  
彼ら（牛たち）をもたらすことに成功することになれば、その者は生きることになろう<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> 実際の戦闘における矢の使用の描写は、マハーバーラタにおいて見られる。原 2014: 73-75 は、MBhār における「矢による心臓の損傷」を論じる。ヴェーダ文献及び叙事詩におけるこの表現については、本稿5を参照。

<sup>8</sup> どちらの意味か定かでない。EWA s.vv. *bhāma*<sup>-1</sup>, *bhāma*<sup>-2</sup>。

<sup>9</sup> 本讃歌中にはさまざまな韻律が用いられるが、16-18 節はトリシュトゥプの部分である。Jamison/Brereton は牛たちをマルト達であるとする。Geldner は註で祭官たちであるとし、口の中の矢とは宗教的な発語であるとする。彼が例として挙げる RV 9.69.1 と 10.42.1 では、神格に向かう讃歌が的を狙う矢に喩えられ、2.24.8 ではブラフマナスパティ自身の発する讃歌が矢に喩えられる。また 6.75（武器の歌）の特に 12ab, 15-17 にも同様の観念が見られる。

## 2.3 心臓を他の手段で攻撃する例

本節では、AV において敵の心臓を言葉の矢以外の手段によって「√vyadh 貫く」（一例のみ √bhid 割る）と表現される例を挙げる。必ずしも意味と構文が明確でない病気の治癒（本稿 3.1 も参照）を扱う AVŚ 9.8.22 を除いては、ダルバ草などの味方となる超人間的存在に詩人が敵対的諸力の心臓を貫くことを命令する文脈である。

AVŚ 19.28.4 = AVP 13.11.4 ダルバ草の呪文

*bhinddhī darbha sapātmānām / hṛdayam dviṣatām maṇe*

*udyān tvācam iva bhūmyāḥ / śīra eṣām ví pātaya*

ダルバよ、ライバルたちの、憎む者たちの心臓を割れ、首飾りよ、

昇りつつある者（太陽）が大地の皮膚を砕け散らせるように、これらの者たちの頭を砕け散らせよ！

AVŚ 5.20.3 = AVP 9.24.4 陣太鼓讃歌

*vṛṣeva yūthé sāhasā vidān / gavyānn abhī ruva saṃdhanājī*

*śucā vidhya hṛdayam páreṣām / hitvā grāmān prācyutā yantu śātravaḥ*

雄牛が群れにおいて突然見出され、雌牛を求めつつ咆えかるように咆えかけよ、戦利品を勝ち取るものよ！

光熱・苦しみによって他の連中の心臓を貫け。敵たちは一団たちを捨てて逃げ去って行け。

AVŚ 8.6.18 = AVP 16.80.9 妊婦を魔から守る呪文

*yás te gárbham pratimṣāj / jātām vā mārāyāti te*

*piṅgás tám ugráadhanvā / kṛṇótu hṛdayāvidham*

お前の胎児を流産させようとする、またお前の生まれてすぐの胎児を死なせようとする者を、

強力な弓持つピンガは心臓を貫かれたものと為せ。

同 24

*yé sūryāt parisárpanti / snuṣéva śvāsūrād ādhi*

*bajás ca téṣām piṅgás ca / hṛdayé 'dhi ní vidhyatām*

舅から嫁が這うように、太陽から這うものたちの

心臓において、バジャとピンガは貫き下ろせ！

AVŚ 5.29.4 = AVP 13.9.5 アグニ讃歌：魔に対する呪文

*akṣyau ní vidhya hṛdayam ní vidhya / jihvām ní tṛnddhi prá dató mṛṇīhi*

*piśácó asyá yatamó jaghāsa\_ / āgne yaviṣṭha práti śṛṇīhi*

両眼を貫き下ろせ！心臓を貫き下ろせ！舌を割き下ろせ！歯たちをすりつぶせ！

ここなる者を食べたピシャーチャを、最も若いアグニよ、潰し返せ！

AVŚ 9.8.22 = AVP 16.75.12 様々な病気を追い払う呪文

*sám te śīrṣnāḥ kapālāni / hṛdayasya ca yó vidhúḥ*

リグヴェーダにおける表現「心臓において (L.) 貫く (√vyadh)」とその意味的展開

*udyānn āditya raśmibhiḥ<sup>1</sup> śr̥ṣṇó rógam anīnaśo<sup>2</sup> aṅgabhedām aśīsamah*

お前の頭の頭蓋骨たちは共に、心臓を貫くものも。

昇りつつ、太陽よ、皮紐 (= 光線) たちによって、頭から病気をお前は消した。手足を裂く病気を鎮めた。

### 3 「心臓を貫く」という表現が用いられる他の例

次に、「(人) 心臓において √vyadh 貫く」という表現が使われている他の文脈、「病気」と「カーマ」を考察する。

#### 3.1 心臓中の病気: *hṛdayāvīdh-*

「心臓中の病気」という観念は、RV の中でも比較的新しい 1 巻に集まって見られ、4 例存在する<sup>10</sup>。これは、RV に次いで古い文献であり、病気治療の呪法などがテーマとなる AV につながる主題といえる。心臓において病気が存在するという観念がみられる 4 例のうち、RV 1.24.8 では、呪ないによる心臓の破壊に用いられるのと同様の表現「(人) 心臓において √vyadh 貫く」が用いられている。この定型句は複合語 *hṛdayāvīdh-*<sup>11</sup> 「心臓を貫くもの<sup>12</sup> (RV 1.24.8)」 < *hṛdaya-* + *Hvīdh-* となって、おそらく何らかの病を指す。

RV 1.24.8d (さまざまな神格)

*utāpavaktā hṛdayāvīdhaś cit*

(ヴァルナは) また心臓において [病人を] 貫く [病] をも言葉によって取り除く者。

RV 1.24.9a

*śatām te rājan bhiśajāḥ sahāsram*

王 (ヴァルナ) よ、汝には医者たちが百人も千人もいる。

この心臓において貫く病気とは、ヴァルナの司る罪の結果として引き起こされた水腫病である可能性が考えられる<sup>13</sup>。ヴァルナが心臓の病を言葉の力によって取り除く医者であることが言われているものと思われる<sup>14</sup>。ヴァルナによってもたらされる病である水腫病

<sup>10</sup> RV 1.50.11, 1.122.9, 1.163.3 (≈ AVP 20.96.19a, 20. Cf. AVŚ 2.33). 1.50.11, 1.163.3 は内容に乏しいため本節では扱わない。

<sup>11</sup> Scarlata s.v. *dhi-* Br + 「病気」はこれではなく *vi-ā-dhā* よりとされる (EWA s.v. *vyadh*) 。

<sup>12</sup> 二次的に「心臓を貫かれた者 (AVŚ 8.6.18 = AVP 16.80.9)」。

<sup>13</sup> この二つの可能性は以下に掲げる RV の薬草讃歌の詩節に見出される (薬草が罪による病を癒す)：

RV 10.97.16 (薬草讃歌)

*muñcāntu mā śapathyāḍ | ātho varuṇyāḍ utā  
ātho yamāsyā pādibīṣāt | sārvasmād devakibīṣāt*

(薬草たちは) 私を解放せよ、呪いの [足枷] より、またヴァルナの [足枷] より、  
またヤマの足枷より、神々に対する全ての違反より。

<sup>14</sup> 病を引き起こすものがその治療をも司るという考え方は、以下にも見られる：

RV 7.46.3 (ルドラ讃歌)

*yā te didyūd āvasṛṣṭā divāś pāri<sup>1</sup> | kṣmayā cārati pāri sā vṛṇaktu naḥ  
sahāsram te s<sub>u</sub>vapivāta bheṣajā<sup>1</sup> | mā nas tokēṣu tānayeṣu rīriṣaḥ*

天より発し降ろされて大地に行く飛び道具は我々を避けよ。

非常に求められる者 (ルドラ) よ、お前には千の薬たちがある。我々の子孫後裔を傷付ける勿れ。

が心不全の結果だった可能性なども想定されうる。或いは *hr̥dyotá-* などと同様に、心臓におけるズキッとするような或る種の苦痛の感覚が、矢に刺された感覚に喩えられている可能性もある。

以下の詩節は、ヴァルナが引き起こす心臓の病を扱う。

RV 1.122.9 (一切神讃歌)

*jáno yó mitrāvaruṇāv abhidhrúg' apó ná vām sunóti\_ akṣṇayādhruk*  
*svayám sá yákṣmaṃ h̥ṛdaye ní dhatta' āpa yád īm hótābhīr ṛtāvā*

ミトラ＝ヴァルナ両神よ，[汝らに] 対して騙す輩，

(ソーマでなく) 水<sup>15</sup>たちを汝らの為に搾るようなことをする，邪なやり口で騙す輩は自ら病魔 (*yákṣma-*) を自分の心臓の中に置くのだ，

(一方で) 天則に従う者は献供たちによって何らかのものに到達している (=成果を得ている) とき。

RV 1.122 の 6-9 節はミトラ・ヴァルナ両神に捧げられている。ヴァルナに関する歌であることから、この「病魔」とは水腫病を指している可能性がある。そうすれば自らソーマと偽って備えた水に、今度は自分が苦しめられるという寸法となる。またソーマは飲むと心臓に溜まるとされる<sup>16</sup>ので、ソーマの代わりの水も心臓に溜まり、水を司るヴァルナの支配力のもとで病気を引き起こす、というメカニズムも考え得る。*hr̥dyotá-* はこれと同様の病であるが、その治療薬は AVŚ 6.24.1 によれば「水たち *āpah*」である (Zysk p.29) 事実、また RV 6.50.7 で水たちが医者と呼ばれる事実 (Geldner 註 1.24.9a) <sup>17</sup> も、水腫病との関連を窺わせる。

<sup>15</sup> Cf. RV 1.161.8. また水たちはヴァルナの妻である (Narten 1996)。

<sup>16</sup> 本論では詳細に論じないが、RV 1.168.3, 1.179.5, 8.2.12, 8.48.12 における表現 *hr̥tú pūtā-* 「心臓たちの内に飲まれる」参照

<sup>17</sup> RV 6.50.7 (一切神讃歌のうち、本 7 節は水たちに捧げられる。)

*omānam āpo mānuṣīr āmyktaṃ' dhātā tokāya tānāyāya sām yōh*  
*yūyām hí ṣṭhā bhiśājo mātītāmā' vīśvasya sthātūr jāgato jānitr̥h*

マヌに属する水たちよ、欠けるところなき助けを、生命力についての恵みを、子孫後裔に置き定めよ、お前たちは最も母である医者たち、静止するものも動くものもあらゆるものの生みの母たちだからだ、

AVŚ 6.24.1, 2 ≈ AVP 3.17.6, 8.8.45 (水たちへの讃歌)

*himāvataḥ prā sravanti' sīndhau samaha saṅgamāh*  
*āpo ha mātīyam tād devīr' dādān hr̥dyótābhesajām*

ヒマラーヤから彼女らは流れ出す、合流点はインダス河のどこかだ、

女神たる水たちは、私に *hr̥dyótā-* への薬 (6 のアクセントは異常) を与えるがよい、

*yān me akṣyōr ādīdyōtā' pāṣṇyoh prāpadoś ca yāt*  
*āpas tāt sārvaṃ nīś karan' bhiśājām sūbhiśaktamāh*

私の両目、両踵、両足先において痛むもの、

水たちはそのすべてを帳消しにするがよい、医者たちのうちでも最も良い医者である者たちは、

### 3.2 心臓中のカーマ

各種の感情が心臓へとやって来るという観念は RV に既に存在する<sup>18</sup>が, AV ではさらに、愛の感情が矢の形で心臓を貫く (√vyadh) という表現が見られる。心臓が、呪法における破壊行為の一つとしての「貫く」行為<sup>19</sup>の対象となっている。

AVŚ 3.25.1–3 (女性の愛を得る呪ない)<sup>20</sup>

uttudās t<sub>uv</sub>ót tudatu / mǎ dhṛthāḥ śáyane s<sub>uv</sub>é

īṣuḥ kāmasya yā bhīmā / táyā vidhyāmi tvā hṛdī

押し開くものはお前を押し開け、自らの床において

カーマの恐ろしい矢によって私はお前を心臓に於いて貫く。

ādhīparṇāṃ kāmasyāyām / īṣuṃ saṃkalpākulmalām

tām sūsaṃnatām kṛtvā / kāmo vidhyatu tvā hṛdī

望みを羽根として、カーマを鏃とし、意図を柄とする矢を、

しっかりと真っ直ぐにされたものとして、カーマはお前を心臓に於いて貫け。

yā plihānam śośáyati / kāmasyēṣuḥ sūsaṃnatā

prācīnapakṣā vṛṣṇā / táyā vidhyāmi tvā hṛdī

脾臓を乾かす、しっかりと真っ直ぐにされた、前方に羽をもつ、焼き尽くすカーマの矢によって、私はお前を心臓に於いて貫く。

## 4 言葉が矢に例えられる他の例

### 4.1 RV における神格への讃歌

矢の比喩のうち典型的なものは以下の2詩節である。

RV 9.69.1 では詩人の *matī-* (発話されて言葉になる前の讃歌) が、まず弓につがえられた矢に喩えられる。次にその *matī-* が矢として神格へと放たれる様が、仔牛が母牛の乳房へと駆け寄っていく様に喩えられる (母牛の乳を搾るためには先ず、隔離してある仔牛を母牛のもとへ放して、乳を吸わせる必要がある)。

RV 9.69.1 (ソーマ讃歌)

īṣur ná dhānvan prāti dhīyate matīr / vatsó ná mātūr úpa sarji\_ ūdhanī

urūdhāreva duhe ágra āyati\_ / ásyā vratéṣu\_ ápi sóma īṣyate

<sup>18</sup> 本論では詳細に論じないが、*bhī-*「恐れ」は RV 1.32.14, 10.84.7, 10.146.1, 9.53.1, 2.29.6 に *kāma-*「愛欲」は 10.40.12, 10.64.2, 10.10.7, 1.179.4, 1.129.4 において、心臓に至ることが、*ākūti-*「意図」は 10.151.4, *krātu-*「企図」5.85.2, 10.64.2, *cinā-*「注意力」は AVŚ 3.25.6 (本歌) において、心臓中にあることが述べられる。

<sup>19</sup> Cf. Sadosky 2012 (4.2.1, 5.2.2, 5.3, 6.3, 8.3); West 2007: 333f.

<sup>20</sup> 上記詩節のより後代の解釈による実用法は KauśS 35.21–28 (Cf. Caland 1900: 119) に述べられる：

pratīkṛtim avalekhanīm dārbyūṣeṇa bhāṅgajyena kaṇṭakasaṅkalyayolīkapattrayāsītālakāṇḍayā hṛdaye vidhyati

描かれた (彼が意の儘にしたい女性の) 像を、ダルバ草製の弦をもち、麻製の弦をもつ [弓 dhānūr- (n.)] でもって、とげを鏃とし、梟の羽根をもち、黒 ala- 樹を軸とする [īṣu-/śaravyā- 矢 (f.)] でもって、心臓に於いて貫く。

矢が弓に [掛けられる] ように、考えは掛けられている。  
 仔牛が母 [牛] の乳房のもとへと [放たれる] ように、放たれる。  
 広き流れもつ [雌牛] の様に先にやって来つつ搾り出す。  
 その者の命令でソーマは送りこまれる。

次に掲げる RV 10.42.1 においても、詩人による自分自身への讃歌を作るようにとの命令のなかで、詩人が射手に、神格が射る対象に、讃歌が矢に喩えられている。他の部族の言葉より優れた言葉を語ることによって、インドラを味方に引き寄せんとしているのである。

RV 10.42.1 (インドラ讃歌)

*āsteva sū pratarāṃ lāyam āsyan<sup>1</sup> bhūṣann iva prā bharā stómam asmai  
 vācā viprās tarata vācam aryó<sup>1</sup> ní rāmaya jaritaḥ sōma índram*

身を屈めて、更により前へと射る射手のごとく、  
 準備している者のごとく、その者に讃歌を持って行け。  
 言葉によって余所者の言葉を越えよ、(靈感に) 震える者たちよ！  
 歌い手よ、ソーマにおいてインドラを慰めしめよ！

上記 2 例では、矢が戦車、船、使者など<sup>21</sup>と並び、高速で進んで神格まで到着しおおせるものの一つとして讃歌の喩えに用いられており、攻撃的側面は意図されていない。

RV 2.24 では、祭官の神 *bṛhas/brāhmaṇas pāti*-「言葉の主」がインドラを助けて、牛たちが閉じ込められている *valá*-「防壁」を、火の熱をもつ言葉の力で破壊するという神話への言及がなされている。その言葉が弓の矢に喩えられている可能性がある。

RV 2.24.8 (ブリハスパティ讃歌)

*rājyena kṣipréṇa brāhmaṇas pātir<sup>1</sup>yātra vāṣṭi prā tād aśnoti dhānvanā  
 tāsya sādhvīr īśavo yābhir āsyati<sup>1</sup> nṛcākṣaso dṛśāye kārṇayonayaḥ*

天則を弓弦とする速き弓によって、言葉の力(ブラフマン)の主は望みの所にとどく。  
 彼には、それによって射るところの真っ直ぐ(飛ぶ)矢たちが見えるためにある(= あるのが見える)、人間に目を配り耳を居場所とする [矢たち] が。

#### 4.2 後代における言葉の戦い、人を悪く言う言葉

BĀUM=K 3.8.2 では *Vācakanvī-* が *Yājñavalkya-* に神学問答 (*brahmódyā-*) で挑戦する際の台詞では、彼女のする二つの質問が「敵を貫く二つの矢 *dvaú bāṇavantau sapatnātivyādhinau*」に例えられる。また MBhār 5.34.73-77 でヴィドゥラがドリタラーシュトラ王に悪しき言葉を語らぬよう言葉の制御を説いて、「しかし言葉の鏃は取り除くことができない。それは心臓の中に有るのだから。 *vāksalyas tu na nirhartuṃ<sup>1</sup> śakyo hṛdisayo hi saḥ* (76cd)」という。

<sup>21</sup> 戦車: RV 7.34.1; 船: 10.116.9, 2.16.7, 2.42.1, 9.95.2, 1.46.7; 使者: 6.63.1 など。矢の例は他に AVŚ 20.127.6.



## 5 矢などの武器で物理的に心臓を損傷する例

RV においては、戦争において心臓を矢などの武器で射る確実な例は 1 例<sup>22</sup>存在する。そこで詩人は、プーシャンの持ち物である錐（動物を駆り立てる先の尖った棒）によって、敵の心臓を砕いて屈服させるよう、四詩節をも費やして求める。この錐が同時に「言葉 (brāhmaṇ-)」を促す (8a)」ものでもあることに注意する必要がある。

RV 6.53.5-8 (プーシャン讃歌)

*pāri tṇdhi pañīnām / ārayā hṛdayā kave / āthem asmābhyam randhaya*

完全にかち割れ、パニどもの心臓たちを錐によって、見者よ！

そうして彼を我々に屈服させよ！

*vī pūṣann ārayā tuda / pañér iccha hṛdī priyām / āthem asmābhyam randhaya*

プーシャンよ、錐によって突き貫け、

パニの心臓中に、好ましい／固有の [...] を求めよ！

そうして彼を我々に屈服させよ！

*ā rikha kikirā kṛṇu / pañīnām hṛdayā kave / āthem asmābhyam randhaya*

引き裂け！ズタズタにせよ！パニどもの心臓たちを、見者よ！

そうして彼を我々に屈服させよ！

*yām pūṣan brahmacódanīm / āram bibharṣi\_ āghṛṇe*

*táyā samasya hṛdayam / ā rikha kikirā kṛṇu*

ガルマ滴るプーシャンよ、お前の持つ、言葉 (brāhmaṇ-) を促す錐によって、(奴ら)

皆の心臓を引き裂け！ズタズタにせよ！

また MS では、インドラは猪を心臓を狙い打つことによって退治する。

MS 3.8.3 (Schroeder 95.5) . ≈ KS 25.2 (Schroeder 104.3)<sup>23</sup>

*tásyéndro drumbhūlyābhyāyātya purástād bhittvā hṛdayam prāvṛścad*

インドラはその心臓をドルンブリーでもって狙い、前から割いて寸断した。

MBhār における、物理的な矢が心臓を損傷する例は、原 2014 が 2-2-1 章「臓器としての hṛdaya-, 他動詞的文脈」で扱う。これらは戦場で「矢が敵将の心臓に突き刺さり、又それを突き破る文脈 (p.73)」に現れ、動詞 √bhed 「割く」 hṛdayam bhittvā, bhinnahṛdaya-, √vyadh 「貫く」 hṛdi vivyadhe, √tād 「打つ」 atādayad dhṛdi が心臓の物理的破壊に用いられている。これらの諸例から、古代インドに実際に戦場において矢などで心臓を狙う戦法があったことが分かる。

<sup>22</sup> これ以外に、RV 10.73 においては、ナムチの「pratiṣṭhā hṛdiyā 心臓の抛り所」がインドラの攻撃対象であるが、明らかでない。

<sup>23</sup> Cf. 辻 1987: 169; Mittwede 1986: 131.

## 6 結論

RV の「心臓 (*hārdi/hṛd-, hṛdaya-*)」全 106 例中、8 例で心臓は敵対的祭官や病気を主とする敵対的諸力による破壊の対象とされる。破壊を表す表現の内、定型句「誰かを Acc. 心臓において Loc. 貫く (*√vyadh*)」が存在する。この定型句は、毒矢の形をとった言葉を発して、祭官が敵を呪う場面 (RV と AV)、敵対的諸力をやっつけるよう味方の神的存在に命ずる場面、(AV) ヴァルナによって癒される病の一種の描写 (RV)、また愛 (*kāma-*) の矢によって心臓を貫くことで女性の愛を得る呪法 (AV) においてであった。一方で、矢などの武器によって敵の急所たる心臓を貫く戦法があった。祭官の戦いにおいて、矢としての呪いの言葉によって急所たる心臓を貫くものと捉えられたのは、この実際の戦法との類比、及び RV で讃歌が神格へ発せられる様が矢に喩えられることも背景にあると考えられる。病は命を奪うという点で、矢で敵の急所たる心臓を貫く戦法との類比が成り立つ。女性の愛を得る呪法は、矢によって心臓中にあるとされる愛 (*kāma-*) を射とめんとするものである。要するに、RV ではこの定型句「心臓において (L.) 貫く (*√vyadh*)」によって、感情や精神機能をその内に持つ、生命の核としての心臓中への働きかけが意図されていると考えられる。

### (略語表)

AVP: Atharvaveda (Paippalāda 派). AVŚ: Atharvaveda (Śaunaka 派). Br: Brāhmaṇa 文献. KauśS: KauśikaSūtra. EWA: v. Mayrhofer. MBhār: MahāBhārata. MS: Maitrāyaṇī Saṃhitā. RV: R̥gveda. TB: TaittirīyaBrāhmaṇa. VSM: VājasaneyiSaṃhitā (Mādhyandina 派). ŚBM: ŚatapathaBrāhmaṇa (Mādhyandina 派). #: 讃歌の最終スタンザ.

### (一次文献)

#### RV-Saṃhitā

Sonataṅke, N. S. et al. (eds.)

[1933–51] *R̥gvedasaṃhitā with the Commentary of Sāyaṇācārya*. 5 vols. Puṇe: Vaidika Saṃsodhana Maṇḍala.

#### AVŚ-Saṃhitā

Roth, R. / Whitney, W. D. (eds.)

[1856] *Atharva Vedaḥ Saṃhitā. Erster Band. Text. Berlin.*

Roth / Whitney / Lindenau. (eds.)

[1924] *Atharva Veda Saṃhitā. Herausgegeben von R. Roth und W. D. Whitney. Zweite verbesserte Auflage besorgt von Max Lindenau. Berlin.* (1-19 巻)

Viśva Bandhu Śāstrī et al. (eds.)

[1960–64] *Atharvavedaḥ Śaunakīyaḥ. (Vishveshvaranand Indological Series 13–17)* 6 vols. Hoshiarpur.

#### AVP-Saṃhitā

Dipak Bhattacharya (ed.)

- [1997] *The Paippalāda Saṃhitā of the Atharvaveda*. Volume One: Consisting of the first fifteen Kāṇḍas. Calcutta: Asiatic Society.
- [2008] *The Paippalāda Saṃhitā of the Atharvaveda*. Volume Volume Two: Consisting of the sixteenth Kāṇḍa. Calcutta: Asiatic Society.
- [2011] *The Paippalāda Saṃhitā of the Atharvaveda*. Volume 3. Consisting of the Seventeenth and the Eighteenth Kāṇḍas. Calcutta: Asiatic Society.

Barret, LeRoy Carr (ed.)

The Kashmirian Atharva Veda. *Journal of American Oriental Society* [JAOS], *American Oriental Series* [AOS] New Haven.

- [1906] Book one. *JAOS* 26, 197–205.
- [1912] Book three. *JAOS* 32, 343–390.
- [1922] Book nine. *JAOS* 42, 105–146.
- [1936] Book sixteen and seventeen. *AOS* 9.
- [1940] Book nineteen and twenty. *AOS* 18.

#### KauśikaSūtra

Bloomfield, Maurice. (ed.)

- [1890] *The Kāuṣika-Sūtra of the Atharva-Veda : with extracts from the commentaries of Dārila and Keçava*. New Haven: American Oriental Society.

#### Maitrāyaṇī Saṃhitā

Schroeder, Leopold von. (ed.)

- [1881, 1883, 1885, 1886] *Maitrāyaṇī Saṃhitā*. Leipzig.

Sātavalekara. (ed.)

- [1941] *Maitrayānī-saṃhitā*. Pāraḍī.

#### MahāBhārata

V. S. Sukthankar, S. K. Belvalkar and P. L. Vaidya. (eds.)

- [1933–66] *The Mahābhārata*. 19 vols. bound in 22. Poona: BORI.

(二次文献)

辻 直四郎 [1978] 『古代インドの説話：ブラーフマナ文献より』 東京：春秋社。  
堂山 英次郎

- [2005] 『リグヴェーダにおける1人称接続法の研究』 (大阪大学大学院文学研究科紀要モノグラフ編第45巻) 大阪。

原 實 [2014] 「心 (hrdayam)」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』 70–99。  
東京：佼成出版社。

Bloomfield, Maurice.

- [1897] *Hymns of the Atharva-Veda together with extracts from the ritual book and the commentaries, translated by Maurice Bloomfield*. Oxford.

- [1899] *The Atharva-veda and the Gopatha-Brāhmaṇa*. Strassburg: K.J.Trübner.

Caland, W. [1900] *Altindisches Zauberritual : Probe einer Uebersetzung der wichtigsten Theile*

*des Kauśika Sūtra*. Amsterdam: Müller.

- Edgerton, F. [1919] "The metaphor of the car in the Rigvedic ritual", *AJP* 40 (1919), 175–93.
- Geldner, K. F.  
[1951–1957] *Der Rig-Veda. Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen*. (Harvard Oriental Series 33–36)  
Cambridge, Mass.: HUP.
- Gonda, Jan [1963] *The Vision of the Vedic Poets*. The Hague: Mouton.  
[1965] *The savayajñas : (Kauśikasūtra 60-68. Translation, introduction, commentary)*  
Amsterdam: Noord-Hollandsche Uitgevers Maatschappij, 1965.  
[1980] *Vedic ritual: The non-solemn rites* (Handbuch der Orientalistik, Abt. 2, 4,1).  
Leiden.
- Gotō, Toshifumi  
[1987] *Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen*. Wien: ÖAW.
- Grassmann, Hermann  
[1872–75] *Wörterbuch zum Rig-Veda*. Leipzig. (6., überarbeitete und ergänzte Auflage  
von Maria Kozińska, Wiesbaden: Harrassowitz, 1996).
- Henry, Victor  
[1904] *La magie dans l'Inde antique*. Paris: Dujarric.
- Hillebrandt, Alfred  
[1897] *Ritual-Litteratur. Vedische Opfer und Zauber* (Grundriss der Indo-Arischen  
Philologie und Altertumskunde 3,2) Strassburg.
- Jamison, Stephanie W. / Brereton, Joel Peter  
[2014] *The Rigveda: the earliest religious poetry of India*. 3 vols. New York: Oxford  
University Press.
- Mayrhofer, Manfred  
[1992, 1996, 2001] *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen [EWA], I–III*.  
Heidelberg.
- Mittwede, Martin  
[1986] *Textkritische Bemerkungen zur Maitrayani Samhita*, Stuttgart: Steiner Verlag.
- Narten, Johanna  
[1996] "Zarathustra und die Gottheiten des alten Iran. Überlegungen zur Ahura-Theorie," *MSS* 56 (1996), 61–89.
- Rau, Wilhelm  
[1974] *Metalle und Metallgeräte im vedischen Indien*. Wiesbaden.
- Sadovsky, Velizar  
[2009] "Ritual formulae and ritual pragmatics in Veda and Avesta," in *h2er-. Festschrift für Heiner Eichner*, ed. by Robert Nedoma and David Stifter. *Die Sprache* 48 (2009), 156–166.  
[2012] "Ritual Spells and Practical Magic for Benediction and Malediction in Indo-

Iranian, Greek, and Beyond (Speech and Performance in Avesta and Veda, I)," in *Iranistische und Indogermanistische Beiträge in Memoriam Jochem Schindler* (1944–1994). Wien: ÖAW. 2012.

Scarlata, Salvatore

[1999] *Die Wurzelkomposita im R̥g-veda*. Wiesbaden: Reichert.

Schmitt, Rüdiger

[1967] *Dichtung und Dichtersprache in indogermanischer Zeit*. Wiesbaden.

Schmitt, Rüdiger (Herausgegeben von)

[1968] *Indogermanische Dichtersprache*. Darmstadt.

Sparreboom, M.

[1985] *Chariots in the Veda*. Leiden.

Takezaki, Ryūtarō

[in press] "The Heart (*hārdi/hṛd-*) and the Formula "to fashion (√*takṣ*) a hymn" in the R̥gveda," *Journal of Indian and Buddhist Studies* vol. 65.

Watkins, Calvert

[1995] *How to kill a dragon: aspects of Indo-European poetics*. Oxford: OUP.

West, M. L. [2007] *Indo-european poetry and myth*. Oxford.

Whitney, W. D.

[1905] *Atharva-veda saṃhitā / translated with a critical and exegetical commentary*. 2 vols. Cambridge: Harvard University.

Witzel, Michael / Gotō, Toshifumi, et al.

[2007] *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Erster bis zweiter Liederkreis*. Frankfurt a. M.

[2013] *Rig-Veda. Das heilige Wissen. Dritter bis fünfter Liederkreis*. Berlin.

Zysk, Kenneth G.

[1996] *Medicine in the Veda*. Delhi: Motilal Banarsidass.

(電子資料)

*Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien*. [TITUS]

<http://titus.uni-frankfurt.de>

*Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages* [GRETIL]

<http://gretil.sub.uni-goettingen.de/>

〈Keywords〉 リグヴェーダ\*, 心臓 (*hārdi/hṛd-*, *hṛdaya-*), 詩作, 矢, 貫く (√*vyadh*), 呪法, アタルヴァヴェーダ

たけざき りゅうたろう 東京大学大学院博士課程

## The Syntagma “pierce (*√vyadh*) in the heart” in the RV

TAKEZAKI, Ryūtarō

Among the 106 occurrences of “heart” (*hārdi/hṛd-*, *hṛdaya-*) in the RV, eight concern themselves with the concept of the heart as a core of life, which can be damaged by the attacks of unfriendly forces, especially of hostile priests and diseases. In the AV, some verses are used to gain a woman’s love by letting her pierced in the heart by an arrow of love (*kāma-*). Common to these three cases is the syntagma “pierce (*√vyadh*) someone (Acc.) at the heart (*hṛdaye*) (by an arrow).” The battle of the priests with their power of words parallels that of warriors who kill the enemies by piercing them by arrows in their vital parts i.e. the heart. This idea was combined with the simile of an arrow as a word of praise to a deity and the existence of will-power, diseases and emotions such as fear and love in the heart.